前穂高　北尾根

# 前穂高岳　北尾根

柴崎　朝男

まれな事に計画を後押しするような好天の続いた年であった。前穂のＡ沢に始まり、剱岳の源次郎尾根と、日々馳せていた思い入れのルートが素直に達成出来た。

初秋を迎えての北尾根も同様であった。

未明の涸沢を発ち、カールの底を粛々と辿り、ルートの出だしとなる五・六のコルに向かった。にわかにきつくなった斜面に息を弾ませていると、次第に漉されていく闇を通して、我々を囲むように穂高の役者が揃った。

一見、植物の存在を感じさせない、うち続く岩肌が意外にも色彩豊かな草紅葉に染められていた。しばし見惚れる秀逸な眺めであり、これから高見へと始まる、登攀の緊張を和らげる賜であった。

この上ない紺碧の空の下、あうんの呼吸の仲間と岩肌に触れ、体を預け存分に北尾根を楽しんだこの日であった。

平成十二年九月十八～十九日

八　海　山

# 八海山

猪狩　スミ

八海山は越後三山の一山で、古くから信仰の山として知られている。
山頂付近には険しい岩峰や池塘を配し、登山道には霊神塔が立ち並んで、信仰の深さを今に伝えている。
山頂に至る道は数多いが、屏風道から新開コースをとり、鎖と鉄梯子の連続の道を両手両足を使い、三点確保に気を付けながら登る。
七月はじめの晴天に恵まれた日で、暑さの為かスリルの為か汗ビッショリ、喉もカラカラで登った事を忘れません。
関越道を通るたび、ゴツゴツした山容を眺めながら、いつか登りたいと願っていた山です。

平成十四年七月八日

箱根　駒ヶ岳

## 箱根 駒ヶ岳

武田 伸子

山歩会に入って初めて参加した箱根の駒ヶ岳。神山は天気も良く、絶好のロケーションで、遮る物のない眺め、空の広さ、緑の木や草、ひと足ごとに変わっていく景色。

いつも来る温泉とは違う、箱根の楽しみ方を教えていただいた一日でした。

今も昨日の事のように思い出されます。

平成六年六月十四日

剱岳　源次郎尾根

# 剱岳 源次郎尾根

小山加代子

憧れの山のひとつだった剱の頂にやっと立てたのが三年前。無心に岩を掴み、成し遂げた喜びは格別でした。

翌年、再び頂を踏むチャンスが巡ってきました。前回よりグレードはさらに上がり不安でしたが、何よりも好天に恵まれ、これまでトレーニングを重ねてきた甲斐があり、終了点のピークに到達した時の喜びは最高でした。

三十ｍの懸垂下降や、雪渓と岩峰の真っ只中でのビバーク、それも身も縮むような雷雨のオマケ付き。翌日も紺碧の空と、痛い程の陽射しを反射する源次郎尾根、八ツ峰、長次郎谷の雪渓は岩と雪の「殿堂」の名にふさわしい。

日本離れした風景を、間近で見て体験出来た喜びと感動は、私の大切な夏山の思い出です。

平成十二年八月二十一～二十四日

金　時　山

# 金時山

和田　将子

リーダーデビューの猪狩さんを祝すように、予報が外れて快晴になった。
ゴールデンウイーク中の金時山々頂は大勢の人で賑わっていた。後からツアー客もどんどん登ってくる。
さっきまで富士山にかかっていた雲が流れて、てっぺんが少し顔を出した。目の前の富士山はやはり高い。
すばらしい天気なので、明神ヶ岳まで縦走する事になった。
まっ青な空と、鮮やかな萌黄色の山々の中に、ダンコウバイやミツバツツジ、そして桜のピンクが映えて美しい。ほんとーに！　山はいいナー。
今日も心のキャンバスに春色のやさしい画をしっかりと描きました。

平成十二年五月一日

# 水無川　本谷

山東　廣司

丹沢　水無川本谷

山歩会に入会した頃のなつかしい思い出。
それは、沢登り初体験の丹沢水無川本谷だ。
先輩に「気持ちいいぞ！」と誘われ、そのひと言で決断した。
地下足袋にワラジを履き、自分としてはこの体験全てが未知との遭遇であった。
期待と不安が入り混じった心境で臨んだが、丈夫なジーパンを履いて行ったのが間違いの元、両足が攣ってしまったり、ヤブコギがきつかったり、赤土の尾根では何度も転んでしまって大変だった。
でも、無難な場所でのシャワークライミングは気持ち良かったし、帰りに地元の銭湯で汗を流した後、お疲れ様の一杯は美味しかった。
今となってはこの体験は貴重で、印象強く心に残っています。

昭和五十八年八月一日

高　畑　山

# 高畑山

斉藤　秋夫

冬枯れの日、何度となく登った山、それが高畑山だ。
雑誌で高畑山仙人の事を知り、無性に会ってみたい衝動にかられたのが、この山に惹かれた理由だと思う。
二十歳前、成田からの道は遠く、四時間かけて鳥沢駅に着き、念願の仙人に会うため山頂を目指した。
雑木が多くヤブっぽい山で、棘に痛めつけられながら登った山頂では、秀峰富士山があたたかく迎えてくれた。
誰もいない自分だけの世界に浸り満足。それから麓の仙人の家めがけて一気に駆け下った。
トタン屋根の薄暗い家の中で、本当の仙人みたいなヒゲもじゃの爺さんに入室を許され、お茶を飲みながら、政治の話、世の中の出来事等々、解説者まがいの毒舌で、大変面白かった。
それからは毎年、仙人に会いに行きながら周りの山々にも足を延ばした。
実際に仙人に会えたのは二回だけだったが、もしこの機会がなかったら私は山登りをしていなかったかも知れない。
それ程、高畑山は自分自身にとって大切な山なのである。

昭和四十四年二月

三　頭　山

# 三頭山

添田　和子

奥多摩駅を零時半に歩き出し、鋸山林道から御前山に出て、三頭山まで縦走し、イヨ山を下りドラム缶橋を渡った。

歩き始めには星も見えたが、その後はガスの中の山行。それでも充実感一杯の山行でした。

三頭山の下りで杉タケを採って帰ったのも思い出です。

その年の私は、集会以外はズーと山に全身ドップリと浸かっていました。

近いうちに、またドラム缶橋を渡りに三頭山へ行きたいと思います。

昭和五十二年十月十日

# 槍ヶ岳　北鎌尾根

杉山　栄一

憧れの登山家だった加藤文太郎さんが、その尊い命を落した冬の北鎌尾根を見たくて、季節は違いますが、夏に同僚を誘い出かけました。

高瀬ダムを渡り平坦な道を行くと、空を覆い尽くす数万匹の赤とんぼに迎えられて、湯俣小屋、千天出合と歩き、北鎌沢の出合で泊まる。

北鎌尾根

翌日、稜線に出て幾つものピークを越えながら大迫力で見える槍ヶ岳を目指しましたが、岩場に慣れてない私達には緊張の連続で、稜線を行くのに道無き岩場と両側が鋭く切り立っている尾根です。

次第に天候も悪くなり雷の音も聞こえて来ました。急いで頂上を越えて、肩の小屋に入ったと同時に激しい雷雨でしたので、登り終えた感激より生きていて良かったと思う方が先でした。

平成二年八月

北八ツ　天狗岳

# 北八ヶ岳・天狗岳

斎藤　国一

夜行列車で行く山行が好きだった。
八ヶ岳や北八ツへ足繁く通っていた時期があり、その時は必ず、新宿駅零時十分発の鈍行列車を利用していた。
列車に乗り込み、席を確保するとまずビールを飲む。窓から見える夜の暗さと街の灯を眺めながら何を考えていたのか。やがて瞼が重くなり、ひと眠りして目が覚めると窓の外には山の景色が広がっている。あの列車は日常から非日常へ、僕の身体と精神を運んでくれるかけがえのない乗物だった。
あちこち歩いた筈だが、その頃の山行を思い出すと何故か黙々と、渋ノ湯から黒百合平へ続く樹林帯を歩いている自分の姿が目に浮かぶ。
夏の暑い日であったり、体が浮く程風が強かったり、アイゼンの音まで凍って聞こえる寒い日だとか、歩いた季節は様々だが、中山峠を抜けると見えてくる天狗岳の稜線のシルエットは、いつも変わる事はなかった。

東　沢　渓　谷

# 東沢渓谷

浅子　功夫

冬の西沢渓谷は、整備された道筋の氷壁もよいが……。
東沢は男性的でスケールがでかく、また氷壁が素晴らしい。
第一に現れる人工的な清兵衛滝の大きさ、その先にある東のナメ、陽が高くなると水ではなく氷が落ちてくる。
陽が当たらない西側の乙女の滝、青氷のナメ、そして最大の西のナメ、幅広く下から見えぬ所まで氷壁が続き、アイスクライミングでもしたくなる衝動にかられた一日であった。

昭和五十八年二月十四日

北　穂　高　岳

# 北穂高岳

江黒　支朗

涸沢ヒュッテから北穂沢に入る。
ゴロゴロした急登をジグザグに登ると、
鎖が現れ南稜に取り付く。
振り返ると北尾根がカッコイイ。
南峰に着くとひょっこりオコジョがお出
迎え、槍ヶ岳は一瞬見えたが、すぐ霧の
中に消えた。
翌朝、北穂高小屋の前から見た槍ヶ岳が
美しかった。
これまでも常念岳や奥穂高岳からも目に
していたが、北穂高岳からの槍ヶ岳が一
番だと、今でも思っている。

平成二年十月十五～十六日

谷川　白　毛　門

# 白毛門

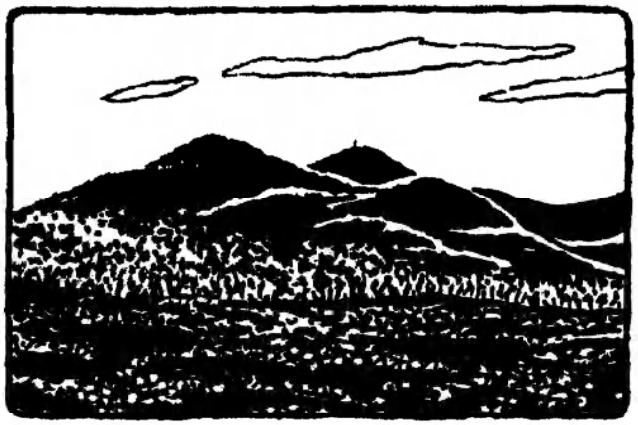
矢島　紀子

初めての白毛門は一九七七年十一月、主人との二人旅、最終列車を土合駅で降り、懐電を頼りに歩き出しました。

二度目は例会山行で二ヶ月後のそれも雪山です。急登の苦しさは忘れましたが、稜線には雪庇が張り出していて、リーダーの「危ないから端を歩かないように！」の注意がとぶ。谷川岳方面の雄大さ、笠ヶ岳から朝日岳はなによりも白く輝いて美しい。

柔らかな雪の中に身を埋めたり、下りはシリセードで童心に返り、楽しかった事ばかり思い出されます。

久し振りにあれこれ考えていたら、山の虫が騒ぎ出しました。自分の気持ちがあの頃と少しも変わっていないと気づきましたから、これからも自分の足で歩けるうちは、山歩きを楽しんでいこうと思っています。



入　笠　山

# 入笠山

松竹　洋一

八月半ば、青柳から山頂を目指した。
上京して半年、二千メートル近い山は初めてだった。濃霧で近くの物さえ見えない。わずかに霧の間からシラビソらしい木を見て、高山の雰囲気を感じた。
途中、二軒の小屋に立ち寄った。「今朝何人くらい駅に下りた？」と初めて聞く地元の方言で尋ねられ、しばらく考えてしまったことも懐かしい。
藤村の信州に憧れた頃から数年、登山界ではキャラバンシューズやキスリングが流行り、入笠山がスズラン山とも言われ、高山植物が多かった頃のことです。

鹿　島　槍　ヶ　岳

# 再びの　鹿島槍ヶ岳

立田きよ子

剱岳から見た双耳峰の美しい姿の山。
初めて鹿島槍ヶ岳に登ったのは赤岩尾根でした。
寝不足の体にムチ打ち、辛くてようやく辿り着いた。
冷乗越から眺めた雄山（立山）、別山、剱岳、お互いを
誉め称えているような雄姿に感動を覚えた。
それまでの疲れも、嫌なこともどこ吹く風。しかし山頂
からの三六〇度のパノラマを期待して登ったが、束の間
日の出が見えたくらいだった。今度こそと出かけた秋は、
カッパを着て歩く方が多かった。
でも日射しが回復すると、紅葉はいつにない美しさ。台
風の影響もなく、寒波もまだ来ていなかったので、葉の
傷みもなく色もきれいだ。
小屋の人も「こんなに綺麗な紅葉は久しい」と感動して
いたくらいだから、なるほどと思う。
雲の切れ間から垣間見る紅葉もよい。尾根から全体を見
渡せるのもよいが、下山の時の赤や黄色のトンネルはも
っとよかった。
自分の足でここまで歩けたという感動でいっぱいでし
た。

平成十二年十月

蓼　科　山

# 蓼科山

石川　とい

北側斜面の登りは、まるで地球儀の球面を攀じ登るようだ。いつもは邪魔なピッケルもアイゼンの前爪もカリカリの雪面にくい込み、私達の体を持ち上げてくれる。樹氷が付いた雪景色に見とれながら滑ったり、潜ったりとふかふかの雪と戯れた時から一変し、緊張しながら一歩一歩登った。山頂は大パノラマで遠くの山々まで望め心地良い感動を得た。お椀を伏せたような蓼科山は何処から見ても解る。

南側は雪もなく四月の暖かさ。里では桜の花も散ってしまった、と言う現実に戻された。

平成十二年四月十八日

甲　武　信　岳

# 甲武信岳

石井　征治

この山は、山梨、埼玉、長野の三県に跨っている。昔は、山梨県側の東沢を遡行し山頂に至るのが一般的であったが、今は長野県側からの道が延び、車を利用すれば日帰りも可能になった。

三年程前の二月に長野県側から登った。雪がチラチラして寒い冬らしい日で、重いザックに苦労しながら登った山頂は我々だけだった。その日は、甲武信小屋の前にテントを張り、日暮れが早いので早々にテントに入った。

翌日は風もなく薄日が射していた。遠くの山々を眺め、近くの沢筋を見、のんびりと縦走路を雁坂峠に向かった。だが、雁坂峠に着いたら強い風と雪で、早々に下山したのを覚えている。

平成十二年二月十四～十五日

甲斐 駒ヶ岳

# 甲斐 駒ヶ岳

清武 千尋

釣瓶落としの夕暮れ。遙か高みに黒く浮かびあがる山なみのなかで、ゆっくりと目の前に迫ってくる、がっしりとした仄白い塊を見た。
いくらかアンバランスに見えるが、いかにも地の底から盛りあがってきたような圧倒的な重量感に、この時、もうすっかり惹かれた。
車窓から見たこの山が、甲斐駒ヶ岳という名だと後で知った。たしか十六歳か十七歳の冬のこと。
すっかり虜になったこの山は、いつも、どこから見てもやっぱり堂々としていた。
摩利支天から一気に落ちるあたりが、　特に胸が空いて今でも好きなところだ。
今、目を閉じて甦ってくるのは、正月早々の雪の甲斐駒と、ある日遭遇した霊験あらたかな登行 ―
虚空に突きあげた山頂の祠の前で、颯爽と白装束を風になびかせ、気合いとともに九字を切る先達と修験者の清々しい姿だ。

雲取山～飛竜山

# 雲取山～飛竜山

栖原　優

三峰神社に参拝し、霧藻ヶ峰休憩所で 太陽寺、大日向にマウンテンバイクで山道を駆け下る小川氏と別れる。

今回の泊まりは雲取山荘で、高所の小屋ではまだ珍しい水洗トイレが出来たばかりと新聞のニュースにあり、是非使用して見たいと思った。

樹林の中、旧い山荘の前にぴかぴかのトイレがあったが、凍結防止のため使用禁止の札が。残念……。

山荘の照明はランプで大変よかったし雲取、飛竜、ミサカ尾根、天平尾根と静かな晩秋の山歩きが出来て最高だった。しかし、奥多摩湖上流の親切な釣り宿の家庭風呂に入れて貰い、かき混ぜなかった為に半分が水、出るに出られず狭い湯船の中で震えながら固まってしまった。それが今回の最高傑作でした。

タクシーの運転手の話では、ミサカ尾根、天平尾根は熊の踊り場だそうだ。

遭わなくて本当に良かった。

平成七年十一月

七　面　山

# 七面山

新井　仁志

真冬の一日、信仰の山でもある七面山に登った。登山口にあるお寺の読経に送られて登り始める。

凍った登山道に難渋する。

身延山久遠寺の奥の院である敬慎院があり、やはり厳粛な雰囲気が漂う。

山頂に登るべく石段を上がると山門があり、その向こうに富士山がスッポリ収まっている。まるでその山門を額縁にしたようだ。

登り切った広場はご来光場になっており、春、秋のお彼岸のお中日にはダイヤモンド富士が見られるそうだ。

キーンと張りつめた冷気の中で、身延山を従えた真っ白な富士山を見られただけで、この山行が価値あるものになった。

平成七年一月三十一日

尾瀬　幻の泉

# 尾瀬　幻の泉

永松　康雄

鳩待峠から北東へスキーで一時間ほど、メッケ田代と呼ばれる小さな湿原の近くに春になると現れる「泉」がある。

ヨセ沢の源頭部の小沢が残雪の一時期に池のように現れるだけのものだが、三十年位前に初めて会ったとき以来、数年前に再び発見するまでの間、私の心の中では「幻の泉」として温められ、美化されて来た。

場所もおぼろげの上、残雪とのタイミングで長い間再訪する事が出来なかった。

実際には至仏山はそこから望むことは出来ないのだが、思いの中ではツエルトの彼方には白い頂が望まれ、弁当と昼寝しかした事は無いはずなのに、一人でキャンプをしたような記憶を持ち続けていた。（憧れを持っていた）

今年も軽いスキーを履いて気まぐれな「泉」に会いに出かける。

いそいそと。ときめきながら。

秋田　駒ヶ岳

# 秋田 駒ヶ岳

斉藤くみ子

六月の秋田駒ヶ岳は静かです。
八合目の駐車場のそばから、高山植物のハクサンチドリが私達を迎えてくれて嬉しい。楽しみながらゆっくり歩いていくと、広い湿原に出た。木道の向こうには弥陀ヶ池が見えた。深い雪がやっと消え、一番に咲き出した真っ白なヒナザクラ、チングルマの群落に感激。初めて見たムシトリスミレは、私の目にしっかりと焼き付き、忘れられない花となりそうです。
乳頭山までの稜線は花、花、花。まさに花の山でした。

平成十五年六月十六日

日光　白根山

# 日光 白根山

野澤 信雄

上京して初めての山が表丹沢で、二度目の山行が日光白根山でした。

師範科の友人四人で湯元バス停より歩き出し、金精峠トンネルの手前よりの急登を金精尾根から五色山、前白根山と登り、天気もよいので一気に五色沼まで下った。せっかく登ったのに一番下までとその時思った。

五色沼を回り弥陀ヶ池を巡って奥白根山へ。ガレ場の登りが続き、富士山を小さくしたような岩ばかりの頂上だったが、四方、見晴らしがよかった。これから向かう前白根山を見ながら一気に駆け下り、前白根へ。そこからは木の根が飛び出た道を縫うように下り、白根沢の石ころだらけの道を歩いて、草原の湯元スキー場に出た。湯元のバス停まではすぐだった。

若い時の山は景色や紅葉よりも、よく食べ、ワイワイとにぎやかにしゃべり、秋の空の下を歩いた事を思い出します。

昭和四十四年　秋

早　池　峰　山

# 早池峰山

地口　裕子

「咲いている一番いいときのウスユキソウを見に行かない」と話が出て、意気投合。でも諸事情が私に生じて流れる事六年。今年は雨でも行こうと決断。

小田越から入る。樹林帯を抜けた頃から花の賑わいを見る様になり、上に行くほどにウスユキソウにたくさん出会った。他の山で見たのとは形が違い、丈は同じでも蕾がふっくらと大きい。大自然の厳しさを生命の糧として咲く高山植物が心底いとおしい。

そおっと花と葉を触ると、弾力のある肉質をかすかに感じた。

山頂の神社に拝礼したが、珍しい事に剣先が天に向いた格好で何本も奉納されていた。こんな光景は初めてだ。神話と深い関わりがあるのだろうか？。それとも登山者を護る剣か……。

雨を承知で花を求めて登ったけれど、次は快晴の早池峰に会いに来よう。

平成十六年七月十二～十三日

守　門　岳

# 守門岳

熊沢　靖介

来年冬、山スキーで登るための偵察を兼ね守門岳に登ってみました。

その日は無風快晴で最高の登山日和。そう思ったのもつかの間、樹林帯の暑いこと、最初の水場で皆に余分に水を持つように指示し登りはじめたが、無風で日差しが強く、頂上で温度計を見て一同びっくり、頂上で三十℃。他のパーティーの男性などは上半身はだかで酒盛り。こんな暑い山は初めて、水ばかり飲み、ボーッとしたまま下山。しかし、途中で水もつき、水場まで景色も何も見ず水場にたどり着き、浴びるほど水を飲み、やっと生き返り、無事下山しました。

平成十四年九月

金　峰　山

# 金峰山

大西　千秋

二十年前、格好だけは一人前の冬山装備で登った山「金峰山」。
アイゼン、ピッケルはいうに及ばず、私を覆っていたものは、ゴアのロングスパッツ以外はすべて借り物。
アイゼンも鍛造の八本爪、着け方も歩き方も分からず往生した。
今はあまり見なくなったWヤッケ。ザックは故吉村さんからお借りして、皆さんの力で山の上の石舞台、『五丈岩』を見ることが出来ました。
そして夜の雨が雪に変わり一面の銀世界。
あの水墨画の世界、もう一度アイゼンを着けたい。

昭和五十六年二月十六～十七日

唐　松　岳

# 唐松岳

建部　藤七

春は名のみの風の寒さよ♪
思わずこんな歌を口ずさみたくなる、ご存知『早春賦』の一説である。
四月の安曇野は正にそんな中にある。
「あっ　鹿島槍だ、五竜も見える。武田菱もよくでているぞ」等の列車からの山岳展望は楽しい。
視線を真下に移すとフキノトウが点在し、春はまだ浅い印象でした。のっけからのリフトに乗ると気分はすっかりリラックス。
サクサクと雪を踏みしめ、第一ケルン、第二ケルンと進み、雪の下で見えないが、八方池の辺りにテントを張った。
唐松岳往復の折、岩まじりの尾根にスキーのトレールがついていて驚いたものだった。
茫洋とした記憶の中に、たおやかな雪の斜面、萌葱色の芽吹き、陽光射す雪面で遊ぶ山友のカラフルなウェアー。
今でもはっきり思い出す、雪と戯れた春の日々。

昭和五十八年四月十八～十九日

茅　ヶ　岳

# 茅ヶ岳

石井 裕子

美ヶ原に行く途中、添乗員さんが「右に見えるのはニセ八ツと異名を持つ茅ヶ岳です」と説明があり、すぐ隣には本当の八ヶ岳が見えてくるはずが見えて来ない。その内、「さっきのは本物の八ヶ岳でした」の案内に皆、大笑いした程似ている茅ヶ岳への山行。

前日の雪で思わぬ雪山体験。女岩からの急登にアイゼンを着け、「百の頂に百の喜びあり」と言った深田久弥急逝の地を通り、稜線からの眺めは、金峰山、鳳凰三山、甲斐駒、八ヶ岳、富士山と手に取るようです。

茅ヶ岳山麓にかけては、雨が少なく空気が澄み、日照時間は日本一とか。

次回は、花を愛でつつ山名由来の茅の山頂で、展望を楽しみたいと思っています。

平成十五年四月七日

北　　岳

# 北岳

大西　曜子

アルプスと名のつく山に一度は登ってみたかった。
その夢が実現したのだ。興奮気味で眠れない瞳で見上げた夜空一面の星屑。
威厳をもって聳える北岳バットレス。
きつい登りで心を和ませてくれた可憐な花々。頂上から眺めた雄大な景色と友の笑顔。数々の思い出が、走馬燈のように甦ってくる。
下りの道のりが長かったこと、足が棒のように重たくなり、自分自身を励ました。
やっと登山口に到着し、皆で食べたスイカが本当に美味しかった。
この日の感激を私は一生忘れない。

平成十三年七月三十日

谷　川　岳

# 谷川岳

小川　豊

山を始めて三十数余年、振り返って見ると一番多く登った山は谷川岳だと思う。
連休の少なかった頃、夜行で行け、アプローチが短く、豪雪地帯という事が魅力であった。
春は豊富な残雪で雪山訓練、夏は沢登りに高山植物。秋は紅葉の縦走。冬は雪洞掘りと、二千メートルに充たない山ながら、四季を通して色々変化のある山を楽しませてくれた。
夜行列車が廃止されてからは、車の利用が多くなり、高速道路も延びて日帰りで簡単に白銀の世界を満喫する事が出来るようになった。しかし、いくら便利になっても雪の谷川岳は変わらない。厳しさ、優しさ、いつも新鮮な感動を与えてくれる山である。

木曽駒ヶ岳

# 木曽駒ヶ岳

落合　治男

梅雨明けの晴天に我も我もと押しかけ増発の車中は中高年登山者で大混雑。

雲ひとつ無い千畳敷は、宝剣岳を中心に大カールも私達を存分に楽しませてくれる。出発するがカールは花また花と更に目を楽しませてくれる。

胸突き八丁までくると、ペースダウンしながらも乗越浄土まで来て一安心する。

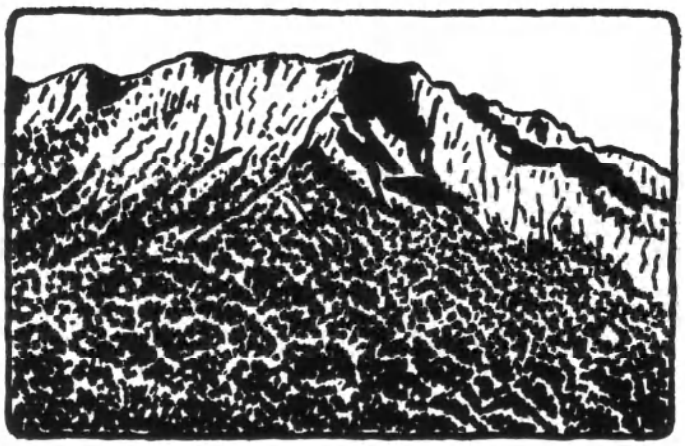
裏側の山々も見えパノラマを楽しむ。更にロープに囲まれた女王のコマクサに感無量です。

スロースローと進むが、茨城メンバーはリタイア寸前で、そこにザックをデポして、一人また一人と頂上に着き、全員登頂できた喜びを実感した。

山頂からの大パノラマは北、南アルプスなどが見えて感動しました。カールに下り、花の見学や記念写真と楽しみ久々の大ヒット山行でした。

コマクサの湯で汗を流し、味噌カツを食べて帰途につく。

平成十一年七月二十七日



会津 朝日岳

# 会津 朝日岳

榎本 義則

私にはかねてから東北地方にあって、和賀岳と並んで、もう一つ行ってみたい山がありました。その山は福島県会津地方の奥深い地にあって、風雪にさらされスラブ状の岩肌を剥き出しにした南会津の名山、ご存じの会津朝日岳です。

いかにも東北の香り、ひびきを持った良い山名だと思います。もしかしたらそのひびきに魅せられて、行って見たくなったのかもしれません。

平成十年七月、その日が訪れた。

梅雨の合間、何となく東北地方を感じさせる、ちょっと翳りのあるのどかな日和を充分楽しんだ。

印象的だったピンク、青と透んだ花色を見せるアジサイ。セールスポイントのブナの樹林帯、そして二本のオオクロベの大木の見事さが胸を打つ。

最後はスラブ状の岩肌をつめ頂へ。赤トンボが舞い、四囲は好展望。登って見たかった山頂で、東京からは遠かった南会津の山々を眺めた。

この日は忘れていて、知らされた誕生日の山行だった。

平成十年七月十四日

阿弥陀岳

# 阿弥陀岳北稜・そしてセミリタイア

佐藤　茂樹

阿弥陀岳北稜は思い出深い山行でした。それというのもこの山行後独立開業し、セミリタイアしました。十年も前に行った山ですが、今でも鮮明に記憶が蘇って来ます。

Mさんとザイルパーティーを組み、不安一杯の山行でした。（Mさんだからではないですよ）岩稜登攀への不安です。前日からテン泊していた仲間達に送りだしてもらうまでは、天候悪化を望んでいました。九割方ルートを登り切り、雪見大福のような天を目指すような直登を終える。阿弥陀岳を登ったWさんとKさんがこぼれるような笑顔で迎えてくれた。感動した！というより、安堵感で一杯でした。

あれから十数年も経ってしまった。今だにリターン出来ないのが悲しい。山に行きたい！。せめて月一回。十キロのダイエットをして、夢の適う日を待ちつつ　二〇〇二年へ

平成元年十二月十八～十九日

守　屋　山

# 守屋山

平松せつ子

南アルプスの北端に位置する守屋山。
茅野から車で二十五分位、杖突峠の登山口から四十分位で避難小屋の建つアカエ沢上部に出る。
ここに群生するザゼンソウがわすれられない。時期的には少し早かったかも知れませんが、こんなに沢山見たのは初めてだったからです。
東峰と西峰があり西峰に三角点が、東峰には山名案内板が設置され、晴れ渡った空に四方の山々を楽しむ事が出来る。雪の積もった西峰の頂で、アルプスの雄姿を眺める為一列に並んだ姿が、電線に止まった雀みたいと笑ったのが昨日の事のように思い出されます。
帰りには気の早い桜もあるかと、高遠城址の桜見物を楽しみました。

平成十五年三月三十一日

針ノ木雪渓

# 針ノ木岳

遠藤　正勝

数年前の五月に山スキーで登り、大変印象に残っている針ノ木大雪渓。

この雪渓は、白馬大雪渓、剱沢雪渓と共に『日本三大雪渓』として知られているが、カール上の雪渓は広くて長く、高度を増すごとに勾配も急になり、それなりのハードさを要求される。

大自然の息吹と自分とが一体化して、山頂直下から春の谷に飛び込んでいく一瞬は、その雄大なスケールに思わず雄叫びを上げてしまう。

あの感動を今一度。

平成六年五月二十三日

越 後 三 山

# 越後三山

吉川　幸雄

初めての上越の山行は、夜行列車に揺られ、なかなか寝付かれず寝不足状態での歩行となる。
上越の山々は山菜の宝庫、リーダーは食べられないシシウドを沢山採ってしまい、山ウドなら良かったのに残念です。
駒ヶ岳は豊富な雪渓を登るが、少々へばり気味。
中ノ岳へは五葉松、シャクナゲ、笹藪ありで歩くには厄介なところ。
中ノ岳の小屋近くで雲行きが怪しくなり、小屋に着いた途端雷を伴った激しい雨となった。
二日目も抜けるような青空の下を、八海山に向かう。潅木の茂った狭い尾根の急下降で、オカメノゾキとなる。スッパリと切れ落ちていて、覗くと体ごと吸い込まれそう。笹竹の根に足を滑らせ、転んでしまい恐い思いをした。
アプローチが長く、虫も多かったけれど、梅雨時にしては好天に恵まれ、思い出に残る、私がまだ新人の頃の山行です。

昭和五七年六月十八～十九日

那須　茶臼岳

# 遠い那須岳の思い出

大西　利春

今から思えば、遠いのんびりした山旅だった。上野を早朝出て、途中「氏家」だったのか、踏切事故でしばらく停車、その日の行程を案じた。その頃雪があれば、どこでもスキーが使えそうな山へは担いで行った。

ジルブレッタのワイヤー式だ。峰の茶屋を越して、樹林に入った所で皆にヤンヤ言われながら板を履いたが、登山道は狭くアップダウンがあり、煙草屋には最後に着いた。小屋での夜は、炬燵を囲んで酒をダラダラ飲んで、寝るのが勝ちと思い、皆よりもふた足も先に寝床に潜り込んだ。押入の隅には氷が見え、蒲団の角も凍っていた。後の人達はどんな蒲団に寝たのだろうか？。

昭和五十五年二月十八～十九日

宝　剣　岳

# 宝剣岳

益田　義則

百名山に燃えだした頃、三人で恵那山に登り、翌日、独りで木曽駒、宝剣岳に挑んだ。駒の鳥居は、積雪でくぐる事が出来ず、祠に合掌し、宝剣を見上げアイゼンを締め直し、一歩一歩慎重にキックステップ。ピッケルを持つ手にもつい力が入る。

山頂で最後の一枚のシャッターを切り下山にかかった。股の間から深い谷底が見え、頼みの鎖は雪の下。この時の下り程怖さを感じた事はなかった。宝剣よ有り難う。

あの時以来、涙という涙は出た事がない。

昭和六十二年四月二十日

朝日連峰　主稜線

# 寒江山

林　亨

姫小百合を見たいと思って参加した山行だった。まるで朝顔か何かの種が一斉に出た様な実生の芽が、沢山生えている。
大きなブナの木の下を登り、斑に雪を頂いた青い朝日の峰々を見る。
六月の朝日はすべての草花が一斉に花を咲かせていた。特に竜門小屋を過ぎてから、平らな尾根の一面に咲く黄色のミヤマキンバイや紅紫色のイワカガミ、そして雪よりも白く輝いて咲いているヒナウスユキソウを見た時の感動は一生忘れないだろう。
前日の晴天が嘘の様な翌日の土砂降りの雨と共に。

平成十三年六月十八～十九日

常　念　岳

# 初めての雪山 常念岳

肥沼　弘子

入会から二年目にして憧れの雪の北アルプスに行ける事になった。それは白いアルプスに魅せられてからなんと、三十年近く経って実現したのです。

その年は積雪が多く、常念乗越迄は腰まで潜る所もあり、息も絶え絶えにひょっこり顔を出したら、目の前に雑誌で見た通りの真っ白い穂高の峰々がバーンと。「ほんまもんだ！」

常念小屋のテラスで、紅い夕日が白銀の穂高の肩に静かに沈んでいく様を、時間（とき）を忘れていつまでも眺めていました。

翌朝、常念岳に登り、薄桃色に染まって行く峰々を「モルゲンロート」だと教えて頂いた。夢の中にいるような夜明けだった。こんな美しい心に染みいる情景を見る事が出来てほんとに幸せでした。

昭和六十三年五月十六～十七日

浅　間　山

# 浅間山

斉藤　和子

すべて借り物の冬山装備で身をかため、初めての雪山に不安と期待に心踊らしている私に、寡黙な父がボソッと言った。

『かあさんと仲良くしてくれよ』「ウン　ウン」と軽く聞き流しながらあたふたと家を出た。

出掛けに些細な事で、売り言葉に買い言葉、ちょっとした母娘バトルを耳にしたからだろう。病の床に臥して二年余、独りでは身動きできない苛立ちと心細さを思うと心が痛んだが、一歩外に出てしまえば、思いはまだ見ぬ山へ。悪戦苦闘の末、辿り着いた黒斑山から視野いっぱいに広がる白と黒の縞模様、〝大きな浅間山〟に目を奪われた。

初めての雪山は不安を超えて、また一つの山の素顔に出会って、私の心は『白い山』の虜になった。そして五日後、呆気なく父は逝った。あの日から、ふた昔経った今頃になって、山行の折りに浅間山を目にすると、あの時の美しかった山容と共に、最初で最期だった『あのひと言』が鮮明に思い出されるのです。

昭和五十四年三月十九～二十日

白　馬　岳

# 白馬岳

市川いつ子

『三〇〇〇m、山頂テラスでコーヒーとケーキはいかが』の文字に、単純な私は技量も考えず、「私を白馬に連れてって」とお願いした。
小屋に泊まり、たくさんのお花と大雪渓。
頂上ではブロッケン現象のおまけ付き。
最高の山行でしたが、神様が初めての山行が恵まれすぎると、山を甘く見てはいけないと戒めに、楽しみだったテラスでコーヒーはお預けでした。
今度は体力と気力を付けて再度チャレンジして、絶景とコーヒーを味わいたい。

平成九年八月十一～十二日

西穂高岳

## 西穂高岳　独標

伊比美弥子

三月の独標は、まだ冬の真っ只中だった。
永遠の憧れ、穂高連峰が厳父の如く凛として
屹立している。
行きも帰りも緊張の連続。風が痛く、凍りつ
いた斜面は怖かった。

時は流れ思い出となって、みんなみんな楽し
かったことに変えてしまう。
行って良かった。登ることが出来て、本当に
嬉しかったと……。

平成十二年三月二十一日

岩手　和　賀　岳

# 和賀岳

立田　哲夫

私の山の原点というべきものでもある真昼山地、和賀岳。別名　阿弥陀岳と呼ばれ、山腹一帯は深いブナの森に刻み込まれた渓谷が走っている。

ある秋に訪れた時のこと、和賀川の冷たい渡渉、紅葉と新雪の三段紅葉。

それにコケ平から和賀岳の寒かったこと、山頂ではエビの尻尾が出来、眼下に田沢湖が広がり、素晴らしい山が待っていてくれました。

帰りに採ったキノコの美味かったことはいうまでもない。

そんな東北の山が好きです。

平成十一年十月十七～十八日

四国　石　鎚　山

# 石鎚山

榎本のり子

一九九八年、この夏雲の平へ行く予定でしたが、思いもよらぬ台風のため、遠く四国へ変更になりました。長い行程を経て西日本の最高峰、修験者の霊山として有名な石鎚山に登りました。

曇り空のなか、私はそのルート、山頂間近の核心部を前にして立ちすくんでいました。

岩壁が通せんぼするように立ちふさがり、三列に並ぶ太い鎖が上方へと延びていました。

「これ登るの？　そうだよ！　エッー……この鎖場を登らなきゃ来た意味がないよ」との声に、見上げれば見上げる程「どうやって登るの！」と不安と恐怖心が先立ち、身も心も萎縮し堅くなってしまいました。「さあ登ろう」の声に意を決して最初の鎖に手をかけると「滑るから手袋を取って」の忠告がとぶ。「鎖は絶対手を離さないぞ」と気合いを入れ、一の鎖、二の鎖、三の鎖とのぼり、皆の暖かいサポートに支えられて、ガスがかかる祠のある山頂に辿り着きました。

寒い山頂で昼食をとり、鎖の感触を手に残し、早々に下山しました。

平成十年八月十九日

鳳 凰 三 山

# 鳳凰三山

和田　重雄

夕闇迫る頃、観音岳の頂上にテントを張った。
もちろん掟破りは承知の上で、こちらは緊急ビバークと勝手に解釈した。
十一月としては暖かい日で、日が暮れるまで、うっすらと砂糖をまぶしたような白峰三山を飽かずに眺めていた。
すっかり夜の帳がおりると、甲府の街が煌めきをまし、その美しさに見とれていた。
寝るのが勿体なくて、酒が尽きるまでこの至福の刻を過ごした。

平成三年十一月十一日

富　士　山

# 富士山

斎藤麻美子

眺めるのが大好きな山に登った。
ある冬、飛行機の窓から見下ろした富士山のお釜はとても美しく、いつも仰ぎ見ていた富士山の別な姿に感動し、「あの頂上に立ってみよう」と決心した。
数年後、ツアー登山で決意は実行できたが、八合目の小屋に着く頃には、息はぜいぜい、足はヨロヨロ、頭痛も感じてきた。
翌朝暗いなか、皆ランプを点け、岩の段差を登っていく。星を足元に見ながら、自分も混ざった。
憧れの頂上は大きく広く、吹き飛ばされそうな風だった。

平成四年七月

穂高　ジャンダルム

# 穂高・ジャンダルム

村田　智昭

ナナカマドが真っ赤に紅葉した涸沢に私はいた。
猿の群が駆けまわり、鳴き声が涸沢カールにこだました。
翌朝、奥穂の山頂で日の出を見る。いよいよ待望のジャンダルムに向かう。ヤセ尾根を通り、ナイフリッジの下りで緊張したが、後は快適だった。
堅い岩の感触を味わいながら、一歩一歩信州側を巻いて登った。
実は、穂高から見たドーム型をしたジャンダルムに憧れ、六年間通い続けたが、山荘まで登っては雨や雪に阻まれた。
七年目の秋晴れの日に登れた嬉しさは格別の思いがある。
「やっと来たぜ　おまちどうさま」
そんな言葉が出たような気がした。

昭和六十二年九月二十～二十一日

# 月 曜 山 歩 会

# やまなみ

# もくじ


前穂高岳　北尾根……柴崎　朝男　1
八海山……猪狩　スミ　2
箱根駒ヶ岳……武田　伸子　3
剱岳　源次郎尾根……小山加代子　4
金時山……和田　将子　5
水無川　本谷……山東　廣司　6
高畑山……斉藤　秋夫　7
三頭山……添田　和子　8
槍ヶ岳　北鎌尾根……杉山　榮一　9
北八ヶ岳　天狗岳……斎藤　国一　10
東沢渓谷……浅子　功夫　11
北穂高岳……江黒　支朗　12
白毛門……矢島　紀子　13
入笠山……松竹　洋一　14
再びの　鹿島槍ヶ岳……立田きよ子　15
蓼科山……石川　とい　16
甲武信岳……石井　征治　17
甲斐駒ヶ岳……清武　千尋　18
雲取山～飛龍山……栖原　優　19
七面山……新井　仁志　20
尾瀬　幻の泉……永松　康雄　21
秋田駒ヶ岳……斉藤くみ子　22
日光白根山……野澤　信雄　23
早池峰山……地口　裕子　24

守門岳……熊沢 靖介 25
金峰山……大西 千秋 26
唐松岳……建部 藤七 27
茅ヶ岳……石井 裕子 28
北岳……大西 曜子 29
谷川岳……小川 豊 30
木曽駒ヶ岳……落合 治男 31
会津朝日岳……榎本 義則 32
阿弥陀岳北稜 そしてセミリタイア……佐藤 茂樹 33
守屋山……平松せつ子 34
針ノ木岳……遠藤 正勝 35
越後三山……吉川 幸雄 36
遠い那須岳の思い出……大西 利春 37
宝剣岳……益田 義則 38
寒江山……林 亨 39
初めての雪山 常念岳……肥沼 弘子 40
浅間山……斉藤 和子 41
白馬岳……市川いつ子 42
西穂高岳 独標……伊比美弥子 43
和賀岳……立田 哲夫 44
石鎚山……榎本のり子 45
鳳凰三山……和田 重雄 46
富士山……斎藤麻美子 47
穂高 ジャンダルム……村田 智昭 48

# あとがき

ＧＳＫレポートの創刊にあたり、まず担当したのが表紙絵であり、毎月毎月この一ページに思いを巡らせていた当時がとても懐かしい。以来何度か同じような機会が巡ってきたが、このように、編集者の企画として長く続いていた、我々仲間達の山の熱い記憶とを合わせた画文を、さらに一冊にまとめてみたいという、思いがけない夢が今叶った。

一人ひとりの文を読みかえし、資料を探し、著者の目になって絵筆を持ったときの指先からさらに穂先の感覚までもが今でも鮮明に甦ってくる。（清）

『やまなみ』と題した、表紙絵の連載が始まったのは、平成十三年二月のこと。以来、平成十七年六月の和賀岳まで四十九回に渡り、延べ四十八人の人に書いてもらった。これはほぼ会員全員で、初めの頃は、表紙絵と巻末の文章がリンクしているとは気付かず、編集者の意図が伝わらなかった事もあったようだ。それでもここまで続けてこられたのは、斉藤和子、大西曜子両編集者の努力の賜で、本当に感謝します。また、行ったことない山や、馴染みの薄い山の姿を、写真を頼りに絵に仕上げる清武の才能には頭が下がります。（和）

やまなみ

発　行　月曜山歩会
板橋区志村　二の十一の二　清武方
発行日　平成十八年九月二十五日
編集者　和田　重雄
表紙絵　清武　千尋
製　本　しらかべ印刷社